

(シンポジウム「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン『都市型がん医療連携を担う人材の実践的教育』の成果」Part

1) (3) 小学校高学年へのがん教育―帝京サマースクールについて―

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-08-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 有賀, 悦子, 佐野, 圭二, 近藤, 福雄, 渡邊, 清高, 大澤, 岳史, 朝倉, 比都美, 笹野, 仲史, 市川, 靖子, 澤村, 成史, 矢口, 成美, 岸浪, 由治, 江口, 研二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10470/00031659

第 82 回東京女子医科大学学会総会

シンポジウム「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン

『都市型がん医療連携を担う人材の実践的教育』の成果」Part 1

(3) 小学校高学年へのがん教育—帝京サマースクールについて—

¹帝京大学医学部緩和医療学講座²帝京大学医学部外科学講座³帝京大学医学部病理学講座⁴帝京大学医学部内科学講座腫瘍内科⁵帝京大学医学部附属病院栄養課⁶帝京大学医学部放射線学講座⁷帝京大学医学部麻酔科学講座⁸帝京大学医学部附属病院広報企画課⁹帝京大学医学部教務課¹⁰帝京大学医学部難治疾患支援学講座

アルガ	エツコ	サノ	ケイジ	コンドウ	フクオ	ワタナベ	キヨタカ
有賀	悦子 ¹	佐野	圭二 ²	近藤	福雄 ³	渡邊	清高 ⁴
オオサワ	ガクジ	アサクラ	ヒトミ	ササノ	ナカシ	イチカワ	ヤスコ
大澤	岳史 ¹	朝倉	比都美 ⁵	笹野	伸史 ⁶	市川	靖子 ⁴
サワムラ	シゲヒト	ヤグチ	ナルミ	キシナミ	ヨシハル	エグチ	ケンジ
澤村	成史 ⁷	矢口	成美 ⁸	岸浪	由治 ⁹	江口	研二 ¹⁰

(受理 平成 28 年 11 月 24 日)

The 82nd Annual Meeting of the Society of Tokyo Women's Medical University

Symposium "Promotion Plan for the Platform of Human Resource Development for Cancer by Tokyo Oncology

Professionals: Practical Education of Human Resources in Urban Cancer Medical Collaboration" Part 1

(3) Educating Young Teenagers about Cancer at Teikyo Summer School through a Campus Visit

Etsuko ARUGA¹, Keiji SANO², Fukuo KONDO³, Kiyotaka WATANABE⁴,Gakuji OSAWA¹, Hitomi ASAKURA⁵, Nakashi SASANO⁶, Yasuko ICHIKAWA⁴,Shigehito SAWAMURA⁷, Narumi YAGUCHI⁸, Yoshiharu KISHINAMI⁹ and Kenji EGUCHI¹⁰¹Department of Palliative Medicine, Teikyo University School of Medicine²Department of Surgery, Teikyo University School of Medicine³Department of Pathology, Teikyo University School of Medicine⁴Department of Oncology, Teikyo University School of Medicine⁵Department of Nutrition, Teikyo University Hospital⁶Department of Radiation Oncology, Teikyo University School of Medicine⁷Department of Anesthesiology, Teikyo University School of Medicine⁸Division of Public Relations & Planning, Teikyo University Hospital⁹Department of Education Affairs, Teikyo University School of Medicine¹⁰Health Science on Supportive Medicine for Intractable Diseases, Teikyo University School of Medicine

A cancer education program for 5th and 6th grade elementary students has been delivered by the Cancer Professional Course at Teikyo University since 2013. The one-day program has taken place annually on the last Saturday in July. Students visit the campus voluntarily in order to participate and attend the lessons. The cancer education program aims to encourage students to contemplate “well-being” through learning about health and cancer, in order to find their role as one of their community. The program mainly consists of hands-on learning that covers laparoscopy, pathology, and palliative care as well as a one-hour hospital tour. Each year 39 to 58 students participated, 48 % of students learnt about the program from their parents, and 72 % of students decided to join the program voluntarily. The students' evaluation of the program showed promising results; awarding it average ratings of between 2.71 and 2.93 points out of 3 in addition to their comments that the program would lead to them modifying some health related behaviors. Practical learning through the campus visit enables young teenagers to have more direct experience of the medical field. This style of learning for students is considered an effective means of promoting education around health and cancer, developing mental toughness in health.

Key Words: cancer education, health resilience, hands-on learning, practical learning, campus visits by young teenagers

はじめに

2012年から、文部科学省がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン（以下、がんプロ）の採択を受けたことから、帝京大学では2013年から4年間にわたり、小学校5,6年生を対象とした呼び込み型がん教育を実施してきた。これは、厚生労働省の第2期がん対策推進基本計画に2012年6月、分野別施策及びその成果や達成度を測るための個別目標に新たに盛り込まれたがんの教育・普及啓発（Table 1）¹⁾を念頭においた取り組みの一つである。

日頃が多忙な臨床の中で、大学内の各スタッフが

どこまで任意に力を貸してくれるだろうかということが計画時点での心配事であったが、すべてのスタッフから好意的に賛同を得ることができた。

方 法

1. 対象

小学校5,6年生50名（2016年は40名）を対象としたが、欠員があった場合はその前後の年齢も参加可能とした。

2. 開催日

小学校の夏休み中の1日として、がんプロ開始2年目の2013年～2016年毎年7月最後の土曜日の10

Table 1 The phase two basic plan to promote cancer control ¹⁾

重点的に取り組むべき課題

(1) 放射線療法、化学療法、手術療法の更なる充実とこれらを専門に行う医療従事者の育成

(2) がんと診断された時からの緩和ケアの推進

(3) がん登録の推進

新(4) 働く世代や小児へのがん対策の充実

全体目標【平成19年度からの10年目標】

(2) がんによる死亡者の減少
(75歳未満の年齢調整死亡率の20%減少)

(2) すべてのがん患者とその家族の苦痛の軽減と療養生活の質の維持向上

新(3) がんになっても安心して暮らせる社会の構築

分野別施策及びその成果や達成度を計るための個別目標

1. がん医療

- ① 放射線療法、化学療法、手術療法のさらなる充実とチーム医療の推進
- ② がん医療に携わる専門的な医療従事者の育成
- ③ がんと診断された時からの緩和ケアの推進
- ④ 地域の医療・介護サービス提供体制の構築
- ⑤ 医薬品・医療機器の早期開発・承認等に向けた取組
- ⑥ その他(希少がん、病理診断、リハビリテーション)

2. がんに関する相談支援と情報提供

患者とその家族の悩みや不安を汲み上げ、患者とその家族にとってより活用しやすい相談支援体制を実現する。

3. がん登録

法的な位置づけの検討も含め、効率的な予後調査体制の構築や院内がん登録を実施する医療機関数の増加を通じて、がん登録の精度を向上させる。

4. がんの予防

平成34年度までに、成人喫煙率を12%、未成年の喫煙率を0%、受動喫煙については、行政機関及び医療機関は0%、家庭は3%、飲食店は15%、職場は平成32年までに受動喫煙の無い職場を実現する。

5. がんの早期発見

がん検診の受診率を5年以内に50%(胃、肺、大腸は当面40%)を達成する。

6. がん研究

がん対策に資する研究をより一層推進する。2年以内に、関係省庁が連携して、がん研究の今後の方向性と、各分野の具体的な研究事項等を明示する新たな総合的ながん研究戦略を策定する。

新 7. 小児がん

5年以内に、小児がん拠点病院を整備し、小児がんの中核的な機関の整備を開始する。

新 8. がんの教育・普及啓発

子どもに対するがん教育のあり方を検討し、健康教育の中でがん教育を推進する。

新 9. がん患者の就労を含めた社会的な問題

就労に関するニーズや課題を明らかにした上で、職場における理解の促進、相談支援体制の充実を通じて、がんになっても安心して働き暮らせる社会の構築を目指す。

時から15時半前後までとした。

3. 募集方法

広報は、近隣小学校(3つの区)への児童数のチラシと掲示用ポスターの配布、ホームページの掲載、区の広報誌への掲載とした。初年度から2年目までは北区、板橋区教育委員会への直接広報も実施した。

4. プログラム

学校に出向く授業(出前授業)ではなく、直接、大学および大学病院まで来てもらう「呼び込み型授業」とした。朝10時より挨拶、児童一人ずつの自己紹介、注意および確認事項、腫瘍内科医1名によるオープニングレクチャー(がんの発生のメカニズムと罹患状況、代表的ながん、タバコやアルコールの影響について、クイズも交えながら、スライドを使った30分の全体講義)で始まり、3グループに分かれて実習室での体験実習(外科、内科、病理各30分)、昼食、病院見学1時間(手術室、外来化学療法室、放射線治療室)、企画責任者である緩和ケア医1名によるクロージングレクチャー(一日のまとめ、Well-being、助け人になることについてスライドと黒板を用いた30分の全体講義、一日のまとめはテキストの空欄に児童が書きこむことで要点を整理)、副学長または企画責任者からの修了証授与で15時から15時半に終わるプログラム構成で、スタッフの準備にかかる負担を軽減させるため、4年間ほぼ固定させた。

自立した存在として児童を受け入れることに重点を置き、親や同伴した大人のための控室は設けず、立ち入れる範囲もレクチャーのみとした。また、スクール中のスマートフォンなど、外部からの児童への直接連絡は控えることを最初に説明し、個別の連絡窓口は事務が受けることとした。4年目は、同時に大人向けのがんセミナーを午後から並列し、大変好評を得た。

5. スタッフ

企画責任者1名、各部門責任者1名、各部門実務者複数名、病院栄養部と学生食堂スタッフ、学生アルバイト(医療系大学生)、病院内案内に広報企画課スタッフ、がんプロ事務職員で構成した。

6. 準備会議

初年度から3年間は2回、4年目は1回とし、スタッフ負担を軽減するようにした。

結 果

1. プログラムの実施

外科実習では、臨床で用いるガウン・キャップ・マスクをして腹腔鏡を操作し、紐でつるした景品を

切り取ることを体験することで、小さな穴から腹腔内の手術ができることを学んだ。病理実習では、医学部教育で使用している実習室で顕微鏡を使い、がん細胞と正常細胞をスケッチすることでその差を観察した。胃がんで正常細胞と明らかに違うわかりやすい標本を選択した。内科実習では小学生用白衣を着て、導入として生体反応を実感するために血圧測定を体験した後、緩和ケア医から絵を使った肺がんの太郎さんの話を聞き、つらさは一つではなく、心の辛さや体の辛さがあり、人によって感じ方が異なり、つらさの質問をすることで他者の痛みを知る方法があることを学んだ。

病院見学では、麻酔科医や看護師の案内を受け、手術室の安全は多職種チームで守られていること、ダ・ヴィンチロボットを例に精度管理による安全の工夫、脳波計をみて意識状態を知ることによって患者さんが苦痛なく手術が受けられることを見学した。外来化学療法室では、点滴台をつけたリクライニングの椅子に座って自分が心地よいと思う位置に動かしてみたり、静脈血管をはっきりと観察できる機械を見たりして、看護師や医師から少しでも楽に治療を受ける工夫がされていることの説明を受けた。放射線治療室では寝たまま治療を受けることができる台を触ったり、様々な角度から狙い撃ちをする放射線の機械が動くところを見学したりした。

こうした治療が通院でできるものもあり、このような体験や見学を通して、がんに罹患しても対処できること、身体への負担が少なく治療できる取り組みがされていること、心地よさや医療安全のために多くのスタッフが働いていることを伝えた。

初年度企画時に、問題として挙がっていたがん体験者が身近かにいる児童が参加している可能性を考え、最後のレクチャーでは、1日の振り返りをした後、次のようなまとめを加えた。

予防や検診は大切なことであるが、努力していても二人に一人はがんになる時代であり、罹患することもありえる。しかし、そのことは予防の失敗や悪いことをした罰のようなものではない。健康とは、よりよく生きること(Well-being)であってがんであるかないかで決まることではないこと、心と身体が落ち着いて日々が過ごせていることであり、私たちは一人一人がこれから先、そのことを大切に生活していきたい。そして、困った人がいたら「大丈夫ですか?」「何かお手伝いできることはありますか?」と声をかけることで小学生でも社会を支えるチーム

の一員として参加できることを話し、終わった。

2. 参加児童の背景 (Table 2)

例年、ほぼ都内からの参加で、5年生が多かった。開催日は、夏休みが始まった2回目の土曜日にあたり、中学校受験のための塾の夏期講習が始まっており、ゆとりのある5年生の方が参加しやすかったものと思われる。参加の受付は、学内外で差は設けず、申し込み順とした。2年目以降は受付開始1時間以内に定員に達した。Webサイトを締め切ってもタイムラグが生じてしまい、50名で受付終了とすることが難しく、結果的に予定以上の参加者となった年があった。そのため、術着着脱(ガウンや手袋)の援助に時間がかかってしまい、実習の時間が短くなるなどしたため、2016年は40名を越えた時点で申し込みを締め切った。結果、4回の参加者数は39～58名とばらつきを生じた。

Table 2 Characteristics of students

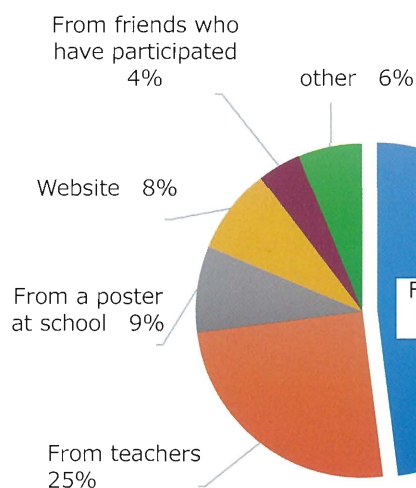
Year	2013	2014	2015	2016
Numbers of students	39	55	58	43
Sex				
Men	17	26	19	25
Female	22	29	26	18
Grade				
5th	21	36	37	26
6th	16	18	18	17
Other	6	1	3	0
Address				
Tokyo	35	55	51	38
Out of Tokyo	3	0	4	5

広報方法が一定してきた2016年の情報ソースは、親からこのプログラムを紹介されて参加してきたものが半数近くに上った(Fig. 1)。児童へのチラシの配布(25%)、学校に掲示されたポスターを見たものもいたが、学校によっては児童だけではなく保護者会などで親にチラシを配布した学校もあったこと、親が口コミで知り勧めるなどしたことが数名のヒアリングから明らかになっている。したがって、小学校高学年に対する告知は、親に対する広報が間接的ではあるが効果的であることがわかった。一方、参加することについては、約3/4の児童が自分自身で決めていた。

3. プログラム評価

アンケート評価に用いられるリッカード尺度で、児童でも回答しやすい3段階で質問した結果をTable 3にまとめた。すべてのプログラムの評価は4年間の平均に比較して、2016年は上昇している。参加児童が異なることにも起因するが、4年間同じプログラムを繰り返してきたことで、大学の教員が日頃は接していない小学生でもわかりやすい説明ができるようになったのかもしれない。体験をすること、実際に本物を見てみることは児童にとって理解しやすく、印象も適切に与えられるものと思われた。例えば、初年度開催準備会議では、東北震災後の放射線被曝のことから、放射線治療室で児童が怖がることのないような配慮が必要だという意見が出されたが、スタッフが問題点を念頭においた関わりを行った結果、見学に同伴したスタッフからも過度な不安

Q1. How did you get the information ?



Q2. How did you decide to join ?

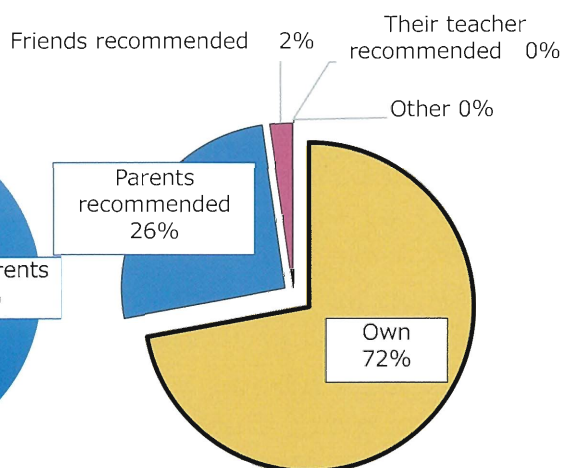


Fig. 1 Source of the information and the person who decided participation (2016 year)

Table 3 The evaluations for each program

	(n = 153)	
	Average	2016
Opening lecture	2.73	2.83
Hands-on learning		
Pathology	2.80	2.93
Laparoscopy	2.93	3.00
Palliative care	2.86	2.95
Lunch	2.71	2.74
Hospital tour		
Operation room	2.87	2.95
Chemotherapy room	2.84	2.84
Radiotherapy room	2.85	2.97
Closing lecture	2.71	2.85
Handout	2.79	2.86
Staffs	2.86	2.95

3 points are good, 2 points are so-so, 1 point is bad.

や誤解などは観察されず、正しい知識がインパクトを持って伝達できていたとの感想が出された。

4. アンケート自由記載

多数の児童が自由記載を残しており (Table 4), 単に楽しい, 嬉しいという感情に留まらない具体的な行動変容を含む感想が記載されている。学べたこと, 医療の技能について, スタッフや他校児童について, プログラム自体の感想, 非日常的な体験ができたこと, 行動や感情が変化したことなどが述べられている。具体的な内容を列挙してみると次のようなものが挙げられる。

「けんぴきょうでがんを見た時は, がんの病気にかかっている人はこんな風になっているんだと気づいた」「内科では実際に(血圧測定の)音を聞いてみて, どういう音かわかりました」「はさみで切るのが楽しかったです。でも, 手術でやるとしたらとても大変そうでした」「放射線ちりょうの機械を動かしてくれるのが良かった」「手術室はすごいと思いました。ここ最近の機械などを初めてしました」「ガンを予防することはとても大切なことだとおもった。だから, 食事のえいようを考えるようにする」「将来, 医者になりたいとおもっていたので, さらに勉強になったと思っています」「がんは100人中50人がなることを知って, 気をつけたいと思いました」「けんしんをうけたい」「今日学んだことをお母さん, 家族に話したいです」「親せきががんなので, 少しでも役に立てたら良いと思います」(カッコは筆者加筆)

Table 4 Number of students who left written comments

Year		
2014	55/55	(100%)
2015	46/55	(84%)
2016	34/43	(79%)

(Number of students who left written comments/Number of questionnaires submitted)

おわりに

文部科学省は, がんに対する正しい理解とがん患者に対する正しい認識および命の大切さに対する理解のために, がん教育を推進し, 検討会の設置やモデル事業を実施している²⁾。各地でがん教育は始まっているが, その多くは, 「がん=死」という恐怖心の払拭³⁾や, 予防や検診の普及を目指したプログラム⁴⁾が念頭に置かれている。

このことはとても大切なことではあるが, それだけではなく, 本来の健康教育の目的は疾病に対する基本的な知識と揺らがない心の育成にある。国民2人に1人はがんになることを思うと, 発症後の感情にも配慮した教育を実施することは, がんに負けない(揺らがない)社会を目指すことをより可能にすると考ええる。

がん治療とともに提供される緩和ケアは, 単に心身の不快な症状に対処することに留まるものではなく, がん罹患したとしても, 患者一人一人が人生を歩みきる力を最大限発揮できるよう支援することにある。小学生に対する教育も, この人生を歩みきる力を育てることにあると考え, 「真の健康とは何か」「がんを通して自分の身体に興味をもち心身を大切にする」「社会を支えるチームの一員としての役割に気づく」ことが重要であると考え。

これからの児童へのがん教育の取り組みとして, 全国で始まっている小学校における総合教育や保健体育教育においてもこのヘルスレジリエンスの気づきを目的とした教育目標をもってもらうことは, この5年間のがんプロの中で, 私たちが学ぶことができた重要なことであった。また, 体験実習は, 有効に児童の行動・感情の変容を促していることがわかった。小学校の中において, 医療体験を提供するのは難しいと思われるが, 児童に気づきをもたらすには講義形式より視覚教材やシュミレータなどを用

いた方がより効果的な教育方法であることを教育機関に伝えていきたい。また、前後に知識の整理として30分間の講義を入れたが、アンケートや一日のまとめを行った時のフィードバックから、伝えたことは理解できており、児童が集中できる時間としても適切な長さだったと考えられた。

生死やがんといった、大きな枠での疾病の理解ができるようになり、1日の体験を親と離れて集中できる年齢に達している10代前半、一方、医学部受験などの具体的な目標を意識する中高ではない小学校高学年に対象を絞った。このプロジェクトを通して、生き生きとした眼差しと新しい気づきを重ねる児童の変化を知ることができ、私達には医療系大学の卒前卒後の教育に留まらず、10代前半の児童にも役割があるという認識、私たちが誇りに思っている医療、職場、姿勢を次世代に伝えられることへの喜び、この二点は帝京サマースクールにかかわった関係者に

共通した気づきであった。

最後に、スタッフが忙しい診療の合間をみながら惜しまず力を貸してくれたことに対し、このプログラムに関わってくれたすべての人に、深く心から感謝申し上げます。

開示すべき利益相反状態はない。

文 献

- 1) 厚生労働省：第4 分野別施策と個別目標。8. がんの教育・普及啓発「がん対策推進基本計画（平成24年6月）」。pp 30-31。 http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/gan_keikaku02.pdf
- 2) 文部科学省：平成26年度がんの教育総合支援事業の実施について。 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/07/1349621.htm
- 3) 厚生労働省：がん教育に関する委員からの意見のまとめ。 <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001oeht-att/2r9852000001oelk.pdf>
- 4) 「こわがらず正しく知って」朝日新聞朝刊（2014年8月25日）